

霞

— 2021 年度夏季展示室だより —

土浦市立博物館
令和3年6月29日発行(通巻第54号)

当館では「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(54) 古写真「アメリカ人形歓迎会」



目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(54) 1
- 博物館からのお知らせ 1
- 古文書が語る土浦の植生(近世) 2
- 幻の土屋政直所用兜(近世) 3
- 江戸の最後の山車人形獅子・古川長延(近世) 4
- ふたつの青い目の人形(近代) 5
- 市史編さんだより 6
- 土浦藩土屋家の横顔 7
- 霞短信「土浦市立博物館で学んだこと」 . 8
- コラム(54) 8
- 情報ライブラリー更新状況 8

昭和2(1927)年4月29日に、土浦尋常高等小学校(現土浦市立土浦小学校)で開催されたアメリカ人形歓迎会の様子です。ケースに入った西洋人形を、たくさんの市松人形と子どもたちの代表が迎えています。この人形は土浦幼稚園に残されました。国際親善のためにアメリカから贈られた約12,000体の友情人形(青い目の人形)は、全国の小学校などに配られました。茨城県に配られた243体のうち、11体が現存しています。【情報ライブラリー検索キーワード「学校」】

博物館からのお知らせ

★★土浦市文化財愛護の会写真部会「戦争の記憶」写真展★★

6月20日(日)~8月29日(日)

土浦市域とその周辺に残る海軍航空隊関係施設や史跡など、戦争の記憶を残す場所を写真で紹介합니다。

★★夏休みファミリーミュージアム★★

7月21日(水)~8月29日(日)

テーマ展「先人たちのうでくらべ Part II—土浦藩士たちの武芸—」

土浦藩の武士たちが挑んだ武芸と、それに長けた先人たちを紹介します。

博物館のおしごと体験

7月25日(日)、8月4日(水) 午前の部:10時~10時50分、午後の部:1時30分~2時20分
博物館の「うらがわ」をのぞいてみませんか。学芸員の仕事もちよっぴり体験します。

定員:各回10名(小・中・高校生)

申込方法:7月13日(火)午前9時から電話または直接

親子はたおり教室

8月20日(金)、8月21日(土)

午前の部:10時~11時、午後の部:1時30分~2時30分

親子ではたおり(さき織り)を体験してみませんか。



博物館マスコット
亀城かめくん

講師:はたおり伝承グループ「綿の実」

定員:各回親子2組(定員を超えたときは抽選)

参加費:200円(材料費)

申込方法:8月5日(木)までに往復はがきを郵送

(希望の日時を第2希望まで、住所、電話番号、親と子の氏名、子の学年を記入)※はがき1枚につき親子1組

古文書が語る土浦の植生

— 産物調査の記録 —

春になると黄色い花を咲かせるタンポポは、誰もが一度は目にしたことのある植物です。キク科に属するこの花は日本国内だけでなく、全世界に分布しています。江戸時代の土浦にも生えていたことが、今からおよそ280年前の「日記」に書かれています。

「日記」は、日々のできごとや感想など個人の記録を記すものと、公用の記録として書き残すものがあります。今回ご紹介する「日記」は公用で、旧東崎町（現土浦市中央二丁目・東崎町・大和町・城北町・川口）の町役人内田久右衛門が、土浦藩に対して提出した文書の控えや、藩から出された達書などを書き留めておいたものです。

江戸時代、日本では中国から薬草を輸入して用いていましたが、8代将軍徳川吉宗は国内に代用できる植物があるのではないかと薬園を経営し、各地に採薬使を派遣しました。享保19（1734）年、国内の動植物や農作物の調査のため、本草学者丹羽正伯（1691～56）の産物調査に協力するよう、全国の大名領・天領・寺社領に指示を出しました。

これにこたえ、翌年7月、東崎町では草93種、水草26種、前栽（野菜）46種、木34種など合計253種の産物調査を土浦藩に提出しました。草のうち、22種には「かてに仕り候」と書かれています。「かて」は「糧」と書き、食料の意味があります。文頭でご紹介したタンポポも「かてに仕り候」と示されています。手元の辞書を引いてみると「若葉は食用」とありました。「じしぱり」「せり」「おんはこ（オオバコ）」なども「かて」、「庭柳」「あさみ（アザミ）」など4種には「葉を給べ候」と葉を食べることが書かれています。

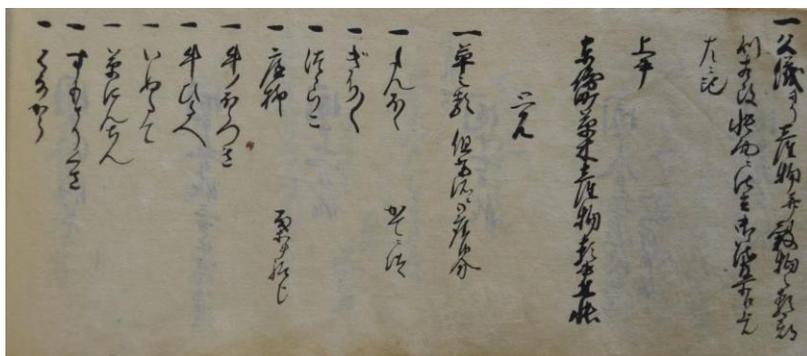
稲作では、早稲7種、中手9種のように多種のイネを育て、刈り取り時期をずらして農作業を分散させ、風水害に対応しようとしていた知恵が読み取れます。

「うなぎもく（セキショウモ）」「じゆんさへ（ジュンサイ）」などの水草は、湖水の透明度が落ちてしまった霞ヶ浦では現在見るができなくなっていました。

土浦藩領で産物調査の記録が残っているのは東崎町のみで、江戸時代中頃の土浦の植生や環境を知ることができる貴重な記録です。

（木塚久仁子）

日記（享保20年7月19日の項）（当館所蔵）



収録されている植物（分類）

分類	単位:種
草	93
水草	26
きのこ	4
竹	4
前栽	46
木	34
早稲	7
中手稲	9
大麦	3
小麦	2
大豆	7
小豆	2
緑豆	1
もろこし	2
ごま	2
荳	2
あわ	4
ひえ	2
そば	1
大角豆	2
合計	253



夏季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しております。

- 御用日記（元禄10年 当館所蔵）
- 河岸改関係文書（安永2年 当館所蔵）



幻の土屋政直所用兜

— 「土浦御武具帳」 —

現在当館で収蔵する土浦藩土屋家の具足は、2代政直（徳相院）所用のもの（表中 No. 2）、政直の息子定直（大慈院）所用のもの（表中 No. 11）、11代拳直所用のもの（個人所蔵）の3領です。このうち政直所用の具足は兜が現存しておらず、全貌を見ることはできません。また、土屋家所用の具足の全体像は未だ明らかではないため、今後新たに発見される可能性もあります。今回は「土浦御武具帳」という古文書の記述から幻の政直所用兜の姿に迫ってみます。

「土浦御武具帳」は寛政5（1793）年に記録された土屋家の具足13領、享和3（1803）年に記録された1領、それ以降に記録された武具の一覧で構成されています。作成者は武具方肝煎の室五郎兵衛ほか武具方4名で、武具の風干（虫干し）の際に具足の所在を再確認した記録です。このうち、「徳相院様御召御甲冑 貳番」の兜は次のような特徴が記されています。

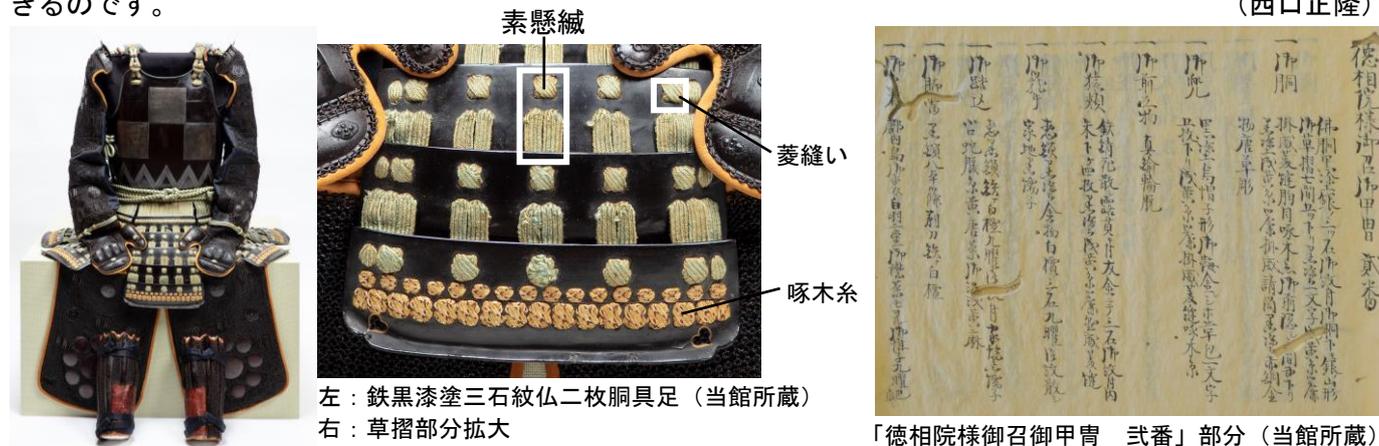
一、御兜 黒塗烏帽子形御鞆金シホ革包一文字五枚下り浅黄糸簾掛威菱縫啄木糸

一、御前立物 真鍮輪脱

これによれば、政直の兜は黒の漆塗りで烏帽子の形をしていました。鞆（兜の後方に付く首・襟を防御する部分）は、金を施した皺革包みの板札5枚で作られて、浅黄色の素懸緘（細かく結び合わせず間隔を置いて結び合わせる手法）、菱縫い（緘糸をクロスさせる手法）、啄木糸（糸糸をまだらに組んだ紐）を施しています。また前立ては真鍮製の輪脱（輪貫）であったと記されています。現存する政直の具足も緘糸が浅黄色なので、統一した色使いをしていたことが明らかになります。また、素懸緘や菱縫い、啄木糸の使用は、草摺の意匠と合致しています。

今回紹介した「土浦御武具帳」のような古文書を確認することで、失われた武具の姿や意匠を知ることができるのです。

（西口正隆）



左：鉄黒漆塗三石紋仏二枚胴具足（当館所蔵）
右：草摺部分拡大

「徳相院様御召御甲冑 貳番」部分（当館所蔵）

夏季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。



下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しております。
●鉄黒漆塗三石紋仏二枚胴具足（当館所蔵）
●徳相院様御具足之覚（個人所蔵）



江戸の最後の山車人形師・古川長延

ふるかわちょうえん

だし

—旧中城町の山車人形—

なかじょう

旧中城町（現中央一丁目）の山車人形「頼政と早太」については、「霞」第43号でご紹介をいたしました。源頼政と猪早太は『平家物語』の「鶴退治」で著名です。鶴とは、頭が猿、胴は狸、手足は虎の怪物で、頼政が弓矢でこれを射落とし、郎党の早太が短刀で退治しました。その場面を現した巨大な造り物は、江戸城下最大の祭礼「天下祭り」にも登場しています。近世の城下町祭礼では、歴史上の人物や伝説・昔ばなしをもとにした出し物が多くみられました。山車人形もそうした人物や場面から取材したものが人気を集め、近代そして現代へと引き継がれていきました。

さて、旧中城町の山車人形は、幕末から明治の江戸・東京で活躍した古川長延の手によるものです。長延は「江戸の最後の山車人形師」と称される名工です。明治33（1900）年、「千代田日報」紙上に連載されたインタビュー記事をもとに、その足跡をたどってみましょう。

長延は文政9（1826）年に江戸で生まれました。子どもの頃から小細工物が好きで、13歳で深川の人形師二代目仲秀英（都染斎）に弟子入りしました。10年間の修行と1年の御礼奉公を経て、師匠の名をもらい仲英真と名乗り独立しました。ところが、作るものが師匠の品と同じだと因縁をつけられ、師匠から店を出すことはならないと責められました。おそらく長延の作品は、師を上回る出来映えだったのでしょう。仕方なく名前を返上し、「泰精斎」の作名をつけて本名の古川長延として制作を続けたと回想しています（「千代田日報」明治33年5月3日付）。

長延は雛人形や五月人形も制作しましたが、山車人形に重きをおいていたようです。山車人形の顔かたちは極まり（決まり）はなく作者の腕次第だと言い、とくに武将については、「こう彫ったら（源）頼義らしくなるだろうとか、ああ仕上げたら八幡太郎（源義家）らしく見えるだろうとか、自分の量見から考え出さなければなりません」と述べています（同5月4日付）。

長延の作品では、川越氷川まつり（埼玉県川越市）の松江町二丁目の「浦島」が著名で、文久2（1862）年の制作です。旧中城町の山車人形には、頭部内側に作者札が貼り付けられており、明治8年の制作とわかります。インタビューの最後で、長延は自身の作品がどこに所在しているかを語っていますが、そのなかで「土浦の頼政に早太」を挙げています（同5月8日付）。中城町の山車人形は、長延自身にとって思い出深い作品のひとつであったようです。

（萩谷良太）



旧中城町の山車人形 頼政（左）と早太（当館所蔵）



夏季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 土浦御祭礼之図（情報ライブラリー内）
- 土浦町内祇園祭礼式真図（情報ライブラリー内）



ふたつの青い目の人形

—土浦とつくばに残された平和の使者—

新一万円札の顔になることが決まった^{しづさわえいいち}渋沢栄一（1840～1931）の生涯と事績に注目が集まっています。渋沢は日本近代経済社会の基礎を築き、社会公共事業、民間外交の面においても指導的役割を果たしましたが、晩年に尽力したのが、人形の交換を通じた日米の親善です。

今から90年余り前、アメリカでの排日移民問題の過熱を憂えた^{せんきやうし}宣教師シドニー・ルイス・ギュリックが、日本へアメリカの児童から、人形を贈る友情交流を計画しました。この呼びかけに関わったのが渋沢です。昭和2（1927）年、約12,000体の「友情の人形」がアメリカから日本に船で到着し、後に「青い目の人形」と呼ばれるようになりました。この返礼に、日本各地や日本の統治下にあった植民地などを代表する58体の特製の市松人形が贈られています。しかし、渋沢の没後、昭和16年以降の太平洋戦争で日米の関係が悪化するなか、処分される人形も少なくなかったといえます。

人形は茨城県には243体配布されましたが、現在は11体のみが確認されています。写真①は、土浦市立土浦幼稚園（土浦市文京町）に伝わる人形です。同園は明治18（1885）年に土浦西小学校（現土浦小学校）の附属幼稚園として開園した、県内で最初の幼稚園です。人形は色褪せ、ひび割れていますが、本体・靴・下着は当時のもので、木製のケースも残っています。頭髪と服は新しいもので、幼稚園百周年記念事業の際に服を新調し、現在は昭和63年の当館の開館に伴い新調されたものを着ています。

写真②は、筑波町立筑波小学校（明治8年創立、旧筑波町国松）に残されていた人形です。筑波町が昭和63年につくば市へ編入され、つくば市立筑波小学校となりましたが、市内11校の統廃合で平成30（2018）年に小中一貫教育校が北条に開校、同校も廃校となりました。この人形は、昭和45年頃までは木製のケースに入れて裁縫室に飾られていましたが、校舎建て替えの時、廃棄されそうになっていたのを同校の用務員が譲り

受けたそうです。現在の帽子や衣装はその方が作ったものですが、本体と下着は元のものと思われます。当時の第16回企画展「青い目の人形—戦争と平和の証言者—」（1995年開催）の際、用務員を務めた方から当館に寄贈されました。

戦中・戦後の社会情勢が変化するなか残された2体の人形。平和と友情の大切さを考えるきっかけを与えてくれる人形を、これからも大切にしていきたいと思います。

（野田礼子）



①青い目の人形（土浦市立土浦幼稚園所蔵） ②青い目の人形（当館所蔵）



夏季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近代コーナーに展示しております。

- アメリカ人形歓迎会写真（土浦市立土浦幼稚園所蔵）
- 保育満了記念写真（土浦市立土浦幼稚園所蔵）



市史編さんだより

ひきふだ いろかわさぶろ べ え け 引札から見えてくるもの—色川三郎兵衛家の醤油大安売り

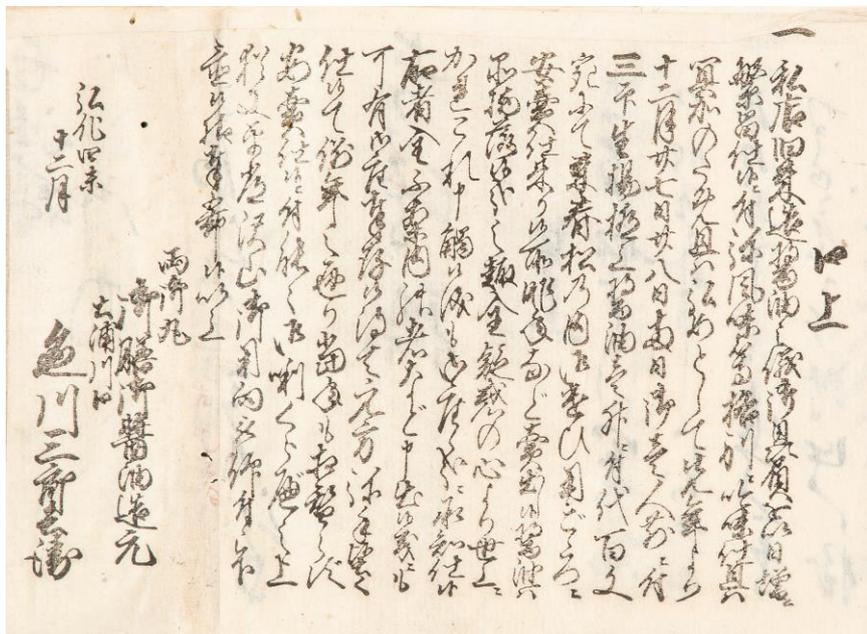
引札は、昔のチラシのことです。江戸時代は木版で刷り、たくさん配ったようです。店や商品の宣伝はもちろんのこと、開店や安売りの際などにも作成されました。多くは墨一色で、曆（カレンダー）がつくものや、「口上」と書き出して商品の良さを述べるものなど様々です。江戸時代の商家が何をどのように売ろうとしているのか、アピールポイントをどこに設定しているのか、引札を読み込むことで商いに携わる人々の〈肉声〉に触れることができるのも魅力です。今回は、土浦で醤油醸造業を営んだ色川三郎兵衛家が弘化4（1847）年に作った引札を見ていくことにしましょう。

この引札（写真）は、冒頭に「口上」と書き、「私店旧来造醤油之儀御歳貢を以日増二繁昌仕候」と書き出します。そして12月27日と28日の2日間、「極上醤油」を1升につき100文で安売りすることが書かれています。左下には、「御膳御醤油造元」「色川三郎兵衛」をやや大きく書いています。「御膳御醤油造元」とは、江戸城に醤油を納めていたことを指します。色川家にとっては、最大のセールスポイントでした。文字の大きさがそのことをよく伝えていきます。

実際に色川家が引札を配ったことは、色川家の9代目である三中和弟の美年によって書き継がれた日記に見えます。弘化2年12月24日の日記には、27・28の両日に安売りを知らせる引札を市中で配ったことが書かれています。引札の効果もあってか、2日間で約5,000人もの人でにぎわったと29日の日記に書かれています。これ以後、歳末の恒例となり、売り上げは多いときで230両ありました。

引札という宣伝方法は、それを手にして購買しようとする層が一定数いてはじめて成り立つものです。土浦で醤油の醸造が始まった江戸時代中期、醤油の大半は江戸向けに出荷されていましたが、後期から幕末期にかけて町の人口が増えるにつれ、「地売り」という地元向けの販売が伸びていきました。引札は、土浦が地方都市として成長するのに連動して醤油の購買層が増えていったことを教えてくれます。

現在でも折り込みチラシは見たら（あるいは見ないうちに）捨ててしまいます。引札も同じで、用が済めばたいてい捨てられるものでした。この色川家の引札は、土浦藩に仕官した農政学者で色川家と親交の深かった長島尉信が保管していたものです。尉信は自分のもつに届いた書簡を整理して保管していましたが、その中にこの引札も貼り込まれていました。170年以上前の引札を目にすることができるのも、几帳面な尉信のお蔭といえそうです。この引札が貼りこまれた書簡集を、多くの方に読んでいただけるように活字にして発刊する準備を目下進めています。（市史編さん係 堀部 猛）



色川家の歳末大安売り出しの引札（当館所蔵）

めばたいてい捨てられるものでした。この色川家の引札は、土浦藩に仕官した農政学者で色川家と親交の深かった長島尉信が保管していたものです。尉信は自分のもつに届いた書簡を整理して保管していましたが、その中にこの引札も貼り込まれていました。170年以上前の引札を目にすることができるのも、几帳面な尉信のお蔭といえそうです。この引札が貼りこまれた書簡集を、多くの方に読んでいただけるように活字にして発刊する準備を目下進めています。

土浦藩土屋家の横顔

このコーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。

基本的には「土浦土屋家系譜」(『茨城県史料 近世政治編Ⅲ』所収)を用いました。ゴシック体部分が引用です。



その九、土屋彦直【つちや よしなお】

土屋左門寛直養子 実水戸中納言源治保卿三男 幼名治三郎

■ **初めて土浦に入る** 同年(文化十一)八月十五日初而在所江之御暇被下

彦直(1798~1847)は、水戸藩主徳川治保の3男として江戸小石川の上屋敷で生まれ、文化8(1811)年4月、14歳のとき土屋家に養子に入り、この年11月に藩主に就任しました。正室には7代藩主英直の娘充子を迎えました。

初めて「在所(土浦)」に赴くことを許されたのは、文化11年8月のことです。この年の記録は残っていませんが、翌文化12年は、9月13日に江戸を出発し、水戸街道を通過して14日に土浦城に到着したことが「在城中岩間領・谷原領巡見並参勤御礼迄之日記」(国立国文学研究資料館所蔵常陸国土浦土屋家文書)に書き留められています。12月14日に江戸に戻るまでの3か月間、土屋家の先祖を祀る祠堂を拝礼し、領内の寺社に参詣しました。藩の読書所で子弟が学ぶ姿を閲し、外丸の矢場で弓術稽古を見学しています。土浦藩領内の巡見では椎茸を採り(大志戸村)、カケスやスズムシをつかまえるなどしています(笠師新田・小山崎村)。漁師が川で鯉やナマズを獲る様子も見ました(君島村)。江戸にいる普段の生活からかけ離れたひと時を過ごしたようです。

■ **外丸再建のための拝借金** 同年(文化十三)四月十二日当二月居城之内外丸住居向其外焼失二付拝借金奉願候処金三千両拝借被仰付

土浦城は本丸敷地の狭さを補うため外丸御殿を建て、藩の政治と藩主の生活の場としていました。幕末の絵図には総建坪648坪、畳数394畳半の大きな建物が描かれています。藩主が執務を行う「表」と、藩主の家族の居住する「奥」がありました。

江戸中期に建設され、改装や改築を繰り返してきた外丸御殿ですが、文化13年2月3日、田宿町から出火した火災で全焼してしまいました。この時焼けた武家屋敷は30軒、侍長屋は39棟、小役人長屋は26棟といい、武士とその家族が大きな打撃を受けました。彦直は再建のため、幕府から3,000両もの大金を借りています。

■ **長女の嫁ぎ先は毛利家** 同年(天保五)十二月朔日娘婚禮之御礼以名代久世隠岐守申上

彦直と正室充子には文化14年正月に長女欽子が誕生しました。欽子は文政12(1829)年に長門国長府藩主12代毛利元運(1818~52)と婚約し、天保5(1834)年に結納・婚礼が行われました。この時、欽子につきそって長府に行ったのが、土浦藩土屋家豊田織江の娘で、毛利家においては玉浦局と呼ばれました。土浦藩士長谷川金太夫の娘寿子(1828~96)は、玉浦局の身近に仕えていましたが、弘化4(1847)年、長府藩士乃木希次に嫁ぎ、2人の間にはのちに陸軍大将となる希典(1849~1912)が生まれました。

(木塚久仁子)

霞 短信

Kasumi-tansin

このコーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、昨年度まで当館の非常勤職員として勤務していた森戸日咲子さんに寄稿していただきました。

土浦市立博物館で学んだこと

今年の3月まで、5年の間、土浦市立博物館の非常勤職員としてお世話になりました。1年目は民俗資料整理係として、主に収蔵庫の清掃や、民俗資料のデータ整理の仕事をしました。保存環境は資料の状態に直結します。埃を払い、温度や湿度を安定させなければなりません。モノが長く形を保つためには人が手をかける必要がありますから、単純に見えてとても責任のある仕事だと思いました。

2年目からは小学校の校外学習も担当し、昔の暮らしの道具展示に携わりました。はじめは、どの資料を見てもらう、どう展示しようとするのがただ楽しかったのですが、実際に道具を紹介し、お話してみると、博物館はモノを相手にするだけではなく、人を相手にする仕事だということがよく分かりました。意外なところから、素朴な、それでいて鋭い質問を投げかけてくる子供たちにモノをどう見てほしいか、モノだけでなくその時代の暮らしまで興味をもってもらうには、それを分かりやすく伝えるには……、と工夫するのが毎年楽しみでした。

他に忘れられないのが、受付に座っていた時に「土浦の美味しいお店はどこですか？」と聞かれたことでした。何気ない一言だったのですが、初めて土浦を訪れる人にとっては、博物館が土浦を代表する窓口のひとつなのだと、はっとする出来事でした。

博物館は、ただモノが並んでいる場所ではなく、市民の方の相談に乗り、同時に助けていただきながら、モノと人をつなぐ場所です。新しい職場でも、1つ1つの作業が、どこかで人と繋がる仕事であることを忘れずにいたいと思います。

(神奈川県教育委員会文化遺産課非常勤職員 森戸日咲子)

コラム (54) 江戸時代の「濃厚接触」

江戸時代末期の文久2(1862)年の7月から9月にかけて、全国で麻疹が流行しました。現在では、麻疹は発熱や咳、発疹を伴うウイルス感染症であり、飛沫感染することが明らかにされています。手洗いやうがい、人との接触を避けることで感染を防げる病ですが、これらの予防法は、江戸時代には一般的ではありませんでした。ここでは当時の麻疹感染の様子を紹介します。

下坂田村(現土浦市下坂田)住人の日記によれば、8月5日に村内神主の麻疹見舞いに行き、そこで飲酒をしています。この頃、近辺の村々でも麻疹が流行しており、日記には見舞いの記述が頻りに現れます。日記の筆者は13日に「夜病氣」と記すと、閏8月12日まで連日「大病覚無(大病のため覚えがない)」と書き続けています。約1か月間病に苦しんでいたようです。

日記の書き手がどこで罹患したのかは分かりませんが、病氣見舞いによる患者との接触、現在の言葉で言うところの「濃厚接触」が原因と考えられます。

(西口正隆)

情報ライブラリー更新状況

【2021・6・29現在の登録数】

古写真 600点(+0)
絵葉書 512点(+0)

※()内は2021年5月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

※新型コロナウイルス感染予防のため、一部ご利用を制限しております。ご了承ください。

霞(かすみ) 2021年度

夏季展示室だより(通巻第54号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir000378.html>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2021年度夏季展示は、2021年6月29日(火)~9月26日(日)となります。「霞」2021年度秋季展示室だより(通巻第55号)は2021年9月28日(火)発行予定です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。(カラー版)